

Publisher's Review

パブリッシャーズ・レビュー

●東京大学出版会・白水社・みすず書房のPR紙●



みすず書房の本棚

【無料送付】

No. 34 2020 春

(表示価格は税別です)

113-0033 東京都文京区本郷 2-20-7 tel. 03-3814-0131 www.msz.co.jp

「良き統治」とは何か

宇野重規

『良き統治』という本書のタイトルを見て、「随分と時代がかつている」という印象を持つ読者もいるかもしれない。何より「統治」という言葉が、今日ではあまり耳慣れないものとなっている。どこか古めかしく感じる方がいてもおかしくないだろう。

はむしろ、統治のための組織や構造を指す言葉としてもつばら理解されるようになった。

その背景には、いうまでもなく、民主主義の発展がある。かつての絶対王権の時代ならばいざ知らず、今日では人民が主権者となり、民主政治が実現している。一人ひとりの市民が自らの自由や権利を擁護するために政府を組織したのであり、そのように組織された政府の権力は民主的な統制に服している。ある意味で、主権者としての集合的な人民が、自分たち自身を統治しているのが民主政治であり、それは自己統治に他ならない。そうだとすれば、自分たちで自分たちのことを律しているのだから、その限りでは「統治」という、上位者が下位のものに支配するという垂直的なイメージにはそぐわない。このような理解が広まった結果、government/government

という場合、「統治」という含意は後景に退き、もつばら「政府」という組織がイメージされるようになってきたといえるだろう。

しかし、本書の著者であるフランスの政治学者ピエール・ロザンヴァロンは、今日の民主主義を論じる上で、あえて「統治」という視点に注目する必要があるという。民主主義の下でも、「統治」という問題は残る。いや、現在、かつてないほど「統治」のあり方やその質が厳しく問われなければならないとロザンヴァロンは強調する。

その理由の一つに、現代民主政治において執行権の力が強大化し、民主主義の大統領制化が進んでいることが挙げられる。その意味で、従来の立法権を中心とした民主主義論は、大きな転換を迫られているのである。現代において、民主主義といえどもつばら代議制民主主義がイメージされるが、その場合にポイントとなるのは、いかにして社会に存在する多様な利害を、政党を通じて国政に反映させるかである。しかしながら、このような視角は、「統治」そのものを検討する上では十分ではない。今こそ、いかなる統治が「良き」のか、この問題をストレートに問い直すべきであるとロザンヴァロンは主張する。

ロザンヴァロンはこの問題をきわめて広い射程において捉えている。一例を挙げれば、ロザンヴァロンは「良き統治」をめぐる議論の起源を求め、ヨーロッパ中世における君主のための教育書である「君主の鑑」(あるべき君主の姿を描く文学の一ジャンル)にまで遡っている。そこまで遡らなくても、本書における議論の中心はフランス革命以降の時代、とくに二〇世紀以降にある。その間、多くの啓蒙思想家やフランス革命の当事者たちの想定に反し、政府の権力を中心とした立法権ではなく、次第に執行権へと移っていった。その過程を綿密に検討しているのが、本書の真骨頂である。

が、意外にロザンヴァロンの問題関心の出発点は現代世界にあるのかもしれない。今日の世界において目につくのは、ポピュリズムと独裁的な指導者たちである。既成政治のゆ

「統治」の原語はフランス語のgovernment、英語でいえばgovernmentである。一般には「政府」という組織を指す言葉として理解されることが多いが、この言葉はもともと、「統治する」を意味するgouverner(フランス語)やgovern(英語)が名詞化したものである。その意味では、この言葉は文字通りには「統治すること」を指す。まさに、統治者が被治者を「統治する」という行為が自らに着目したのがこの言葉である。しかしながら、いつの日か、governmentやgovernment

果、government/government

なままであること」とロザンヴァロンは述べる。これらは代表制を問うだけでは解決しない。問うべきは、統治と民主主義の関係ではないだろうか。

本書でロザンヴァロンは統治のありべき規範を示すのではなく、統治の歴史をたどることで、新たな形を探る。立法権が優位になる19世紀、総力戦により強大な執行権が叫ばれた20世紀前半、普通選挙により選ば

れた大統領に権力が集中する20世紀後半と、統治の力関係の変遷が語られていく。

そして民主主義が大統領制化している現在、選挙が執行者を選ぶものだけに限らば、人々は「一日限りの主権者」ではない。そうした「承認の民主主義」から「行使の民主主義」に移行するための条件が後半では示される。統治者にゆだねてしまっている「統治」を自らの手に取り戻すための条件が探求される。

新たな民主主義の展望をひらくための方策をしめす、ロザンヴァロン民主主義論の集大成である。「政治学・現代政治・思想」【十八日刊】(四六判・456頁・五五〇〇円)

▽本紙ご送付先変更の際は、お名前・新住所・旧住所と、お届けしました本紙の帯封コードを、お手数ですがみすず書房営業部までご連絡下さい▽本紙はみすず書房ウェブサイトにPDFにてダウンロードしてもお読みになれます。www.msz.co.jp/misuzupublishers_review/

私たちは民主主義の中にいるが、民主主義的に統治されているとはいえない。これが、今日の幻滅を生み出している。

いま、民主主義は機能不全を起こしている。多くの民主主義国で政治指導者に権力が集中する「民主主義の大統領制化」が進んでいる。大きな問題は、人々が政治参加する手段である選挙が、執行者を選ぶだけの認証手続きとなつてしまっていることだ。

「市民にとって民主主義の機能不全とは、自分の要望に耳を傾けてもらえないこと、諮問なしに政治的決定がなされること、大臣が統治責任を引き受けようとしないこと、指導者が嘘をついても罰せられないこと、政界が外の世界に十分な説明を果たさないこと、行政の仕組みが不透明

なままであること」とロザンヴァロンは述べる。これらは代表制を問うだけでは解決しない。問うべきは、統治と民主主義の関係ではないだろうか。

本書でロザンヴァロンは統治のありべき規範を示すのではなく、統治の歴史をたどることで、新たな形を探る。立法権が優位になる19世紀、総力戦により強大な執行権が叫ばれた20世紀前半、普通選挙により選ば

れた大統領に権力が集中する20世紀後半と、統治の力関係の変遷が語られていく。

そして民主主義が大統領制化している現在、選挙が執行者を選ぶものだけに限らば、人々は「一日限りの主権者」ではない。そうした「承認の民主主義」から「行使の民主主義」に移行するための条件が後半では示される。統治者にゆだねてしまっている「統治」を自らの手に取り戻すための条件が探求される。

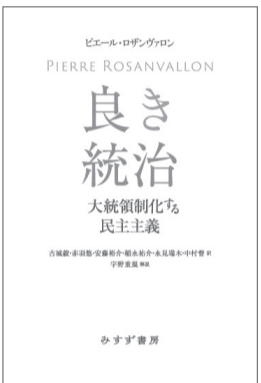
新たな民主主義の展望をひらくための方策をしめす、ロザンヴァロン民主主義論の集大成である。「政治学・現代政治・思想」【十八日刊】(四六判・456頁・五五〇〇円)

ポピュリズム時代の民主主義のかたち

ピエール・ロザンヴァロン

《良き統治 大統領制化する民主主義》

古城 毅・赤羽 悠・安藤裕介・稲永祐介・永見瑞木・中村 督訳 宇野重規解説



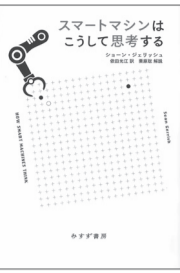
本書でロザンヴァロンは統治のありべき規範を示すのではなく、統治の歴史をたどることで、新たな形を探る。立法権が優位になる19世紀、総力戦により強大な執行権が叫ばれた20世紀前半、普通選挙により選ば

れた大統領に権力が集中する20世紀後半と、統治の力関係の変遷が語られていく。

そして民主主義が大統領制化している現在、選挙が執行者を選ぶものだけに限らば、人々は「一日限りの主権者」ではない。そうした「承認の民主主義」から「行使の民主主義」に移行するための条件が後半では示される。統治者にゆだねてしまっている「統治」を自らの手に取り戻すための条件が探求される。

新たな民主主義の展望をひらくための方策をしめす、ロザンヴァロン民主主義論の集大成である。「政治学・現代政治・思想」【十八日刊】(四六判・456頁・五五〇〇円)

▽本紙ご送付先変更の際は、お名前・新住所・旧住所と、お届けしました本紙の帯封コードを、お手数ですがみすず書房営業部までご連絡下さい▽本紙はみすず書房ウェブサイトにPDFにてダウンロードしてもお読みになれます。www.msz.co.jp/misuzupublishers_review/



経済危機はなぜ起こるのか？ 貧富の差はなぜ固定するの？ 豊かなほどどこから生まれるのか？ お金の役割とは？ こうした問いを理解するために、経済学の最重要人物スミス、マルクス、ケインズに立ち返ってみよう。彼らが出した答えから、経済学の核心を見ることが出来る。

AIバブルに煽られないために

シヨーン・ジェリッシュ
依田光江訳 栗原聡解説

AI(人工知能)について知るための本だが、まるで数学読み物のような味わいだ。人間の思考とAIの「思考」は、どう違うのか？ 自動運転車、音声認識、ワトソン、アルファ碁……AI研究の主なブレイクスルーをたどりながら、スマートマシンの知能のメカニズムを説き明かす。AI設計者の視点を本の中で疑似体験するように読み進めるうちに、簡単なAIの理解からきわめて高度なAIの理解へと、着実に導かれる。

経済学の核心

ウルリケ・ヘルマン

《スミス・マルクス・ケインズ よみがえる危機の処方箋》

鈴木直訳



本書では、市場原理主義者スミス、革命理論家マルクス、恐慌の経済学者ケインズというステレオタイプを解体して、その経済思想の核心を、彼らの生涯と代表作『国富論』『資本論』『一般理論』を辿って明らかにする。

著者ヘルマンはドイツの経済ジャーナリスト。ドイツの戦後復興神話や中流幻想の確に小気味よく分析した本で知られる。

いま資本主義は新たな局面に入っており、しかも危機を孕んでいる。新たな視点を与えてくれる、現代資本主義への処方箋。『経済思想』(四六判・408頁・三六〇〇円)

アタテュルクの建国思想

M.S.ハニオール
新井政美監訳 柿崎正樹訳

《文明史から見たトルコ革命》

約六〇〇年存続したイスラム帝国オスマンは、第一次世界大戦での敗北を受けて一九二二年に消滅した。列強の干渉を退ける独立戦争を経た翌年、近代の国民国家として発足したトルコ共和国はイスラムと決別してゆく。この革命を主導したケマル・アタテュルクは建国の父として崇められ、『ケマルイズム』『アタテュルク主義』というイデオロギーが形成されるまでになった。それは今もトルコの公式イデオロギーであり続けている。

建国に際してアタテュルクは科学主義、理性崇拜、世俗主義など近代西洋の理念を礎として徹底的な改革を断行した。本書はそのアタテュルクが、西洋のどのような影響下に建国思想を形成したのかを追及するものであり、新しい角度からアタテュルク像を描く。さらに、ヨーロッパ発祥

「2008年の出来事を理解するための必読書が登場した。複雑な金融概念をシンプルに説明しながら、全世界にわたる危機前史と、その破壊的影響を壮大に描いている。『ガーディアン』(紙)

「1914年と2008年について、私たちが発する問いは驚くほど似ている。大いなる安定はどのようにして終わりを迎えるのか。理解もできず、制御不能に近い莫大なリスクはどうやって積み上がるのか。巨大な技術システムは、どのように組み合わせられて破壊を引き起こすのか。私たちが見抜く力を与えてくれると考えており、どちらもまもなく登場する。この意味で、本書は人生にまつわるさまざまな確率を取り上げた新しいガイドブックと言えよう」(はじめに)。「統計学」(四月上旬刊)(四六判408頁・予三六〇〇円)



隔離の島、百年の精神史

松岡弘之
《ハンセン病療養所と自治の歴史》

瀬戸内市の長島には二つのハンセン病療養所がある。一九〇九年に大阪府西成郡に開設された外島(そとじま)保善院が三四年の室戸台風で壊滅し移転した呂久(おく)光明園と、隔離を牽引した光田健輔を園長に初の国立療養所として三〇年に開設された長島愛生園である。

隔離の島は連帯と解放の拠点でもあった。日本近代史研究者が手紙や日誌、会議録、行政文書等からその歩みを解明する。

大正デモクラシーと呼びしつづつ外島で誕生した自治会は、プロレタリア運動・エスペラント運動関係者が追放された「外島事件」(一九三三年)、入所者がゼネストやハンスト

で処遇改善を求めた「長島事件」(三三六年)をへて、太平洋戦争のなかで解体した。戦後は治療薬の登場と社会の民主化のなかで、当事者自らが闘い、社会復帰をめざし、らい予防法廃止、国家賠償請求訴訟に至る。生きのびるために近代日本を映し出す。

「日本近代史」(四六判・416頁・五四〇〇円)

「死ぬふりだけでやめとけや 弐雄二詩文集」姜信子編(三八〇〇円)

「政治経済」(十六日刊)(四六判・上432頁・下448頁・各四五〇〇円)

「ナチス 破壊の経済」全二巻 山形浩生・森本正史訳(各四八〇〇円)

リーマン・ショック総括の決定版

アダム・トゥーズ

《暴落 金融危機は世界をどう変えたのか 全2巻》

江口泰子・月沢李歌子訳



「著者既刊『ナチス 破壊の経済』全二巻 山形浩生・森本正史訳(各四八〇〇円)



私たちが1914年について発してきた問いだ。2008年とその余波について、私たちが同じような問いを発するのは偶然ではない。それらは、近代というものの大きな危機につきまとう問いである(最終章より)。「政治経済」(十六日刊)(四六判・上432頁・下448頁・各四五〇〇円)

みすず書房新刊

(2019・11・2020・2) 東京文京本郷2-1-3 三三三三(四三三三) (価格は税別です)

野蠻のハーモニ

ホロコスト史論集
ストロム 田東側各国の文書館が開放され、ホロコストの見直しが進む。方法論と思想史研究の最新線。吉村勇編訳 五六〇〇円

破滅者

ベルンハルト グレン・グールドを主人公にした『破滅者』と『グレン・グールドの物語』の二小説収録。岩下真好訳 五五〇〇円

続・世界文学論集

クッツェー 現代最高の書き手にして読み手がグレートなナイポールまで十六人の作品を鮮やかに批評する。田房芳樹訳 五〇〇〇円

ポードレルの自己演出

『悪の花』における女と彫刻と自意識
小倉康寛 青年は女を彫刻化することで詩人になった。『悪の花』の詳細な読解から「近代人の成長の物語」を析出する。九五〇〇円

フロム・ヘル

『新装合本』
ムアア・キャンベル 鬼才アラン・ムーアの傑作ミミック。切裂きジャック事件に凝縮された英国社会の暗黒。柳下訳 四六〇〇円

キッチン

の悪魔 三ツ星を越えた男
ホワイテ 労働者階級に生まれ英国人であることを最近まで三ツ星を獲得したシェフの波乱万日記。レジー付。千葉敏生訳 三〇〇〇円

意識と感覚のない世界

プリズピロー 麻酔はなぜ意識や痛みを消すのか? 謎めいた医療技術をめぐるノンフィクション。小田嶋誠 勝間田監修 二八〇〇円

フランクフルト学派のナチ・ドイツ秘密レポート

ナイマン他 ナチスの敗北を想定し戦後処理のためにドイツに命知識人が書いた米国防略情報局の秘密文書。野口雅弘訳 六五〇〇円

反殺物の人類史

国家誕生のディープヒストリー
スコット 採集生活を謳歌した「野蛮人」は、いかにして古代国家に家畜化されたのか。農業革命の常識を覆す。立木勝訳 三三〇〇円

映画と黙示録

岡田暁司 『黙示録』が描く「世界の終わり」の光景。その今日への影響を、古今の映画を縦横無尽に取り上げて読み解く。四〇〇〇円

失われた子どもたち

第二次世界大戦後のヨーロッパの家族再建
ザラ 第二次大戦がもたらした孤児たちはいかに救われ、保護され、国民と家族の再建がなされたか。三時・北村監訳 六〇〇〇円

安藤忠雄 建築を生きる

三宅理一 生い立ちから現在まで。世界のアトリーの全体像に迫る建築史家渾身の書き下ろし。本格評伝。作品論の決定版。三〇〇〇円

ゲリラ建築

謝英俊 四川大地震の被災地で家を建てる「住まい」のあり方を問う。台湾人建築家による住宅再建の記録。串山大訳 三三〇〇円

漁業と国境

濱田武士 佐々木真文 領土問題は動かさず、外国漁船が近海で操業している。海の縄張り争いを解決し、漁業の未来を開くには。三三〇〇円

イングリッシュ・ブル

不思議な 英国人のふるまいのルネ
フォックス 人気人類学者が「最も奇妙な、最もわけのわからないイギリス人」という部族を内側から斬る。北條・香川訳 三三〇〇円

構築の人、ジャン・ブルーヴェ

早間玲子編訳 建築職人から建築家へ。フランスの名匠のものづくりと人生を語る言葉をアトリエの協働者が紹介する書。八五〇〇円

回復まで

「新装版」
サートン 体力が衰えたと聞かせるものがある。スランプからゆっくり回復する。六六歳から六七歳の日記。中村輝子訳 三五〇〇円

うつ病と躁病

「新装版」
ピンスワンガー 現存在分析を出发点とし、現象学に依った病者の理解へと、新たな方法論を構築。山本・宇野・森山訳 三三〇〇円

電子書籍 配信開始

2019・11・2020・2
なぜなら
それは言葉にできるから
エムケ 浅井晶子訳

自己責任の時代

モンク 那須耕介・栗村亜寿香訳
キッチン 悪魔
ホワイテ 千葉敏生訳

意識と感覚のない世界

プリズピロー 小田嶋誠 勝間田監修
反殺物の人類史
スコット 立木勝訳

安藤忠雄 建築を生きる

三宅理一
スミス・マルクス・ケインズ
ヘルマン 鈴木直訳

書評コラム

『みすず』一二月合併号「読書アンケート」特集より

本年136名のご回答中、小社刊行書への評を一部ご紹介(敬称略、順不同)▽ラスキン『ヴェネツィアの石』井上義夫編訳「北のヴェネツィア」たるベテルブルク研究に関わる者として、この二つの石造都市に流れる対照的な時間、建築様式の集約・交替・激変によるカタログ化について改めて考えさせられた(坂内徳明)(他に五十嵐太郎、原章二、鈴木了二)▽十川幸司『フロイデアン・ステップ』ラカンの「主体論とは異なった、新たな自我論や「現実」論のヒントがここにある(廣瀬浩司)(他に妙木浩之、斎藤環)▽ホフマン『シユネットル』小原雅俊訳 ロシア・東欧のユダヤ人と一括して扱われるけれど、ポーランドが特別なのがよくわかり興味深かった(杉山光信)(他に三島憲一)▽奥山淳志『庭とエスキース』理解することで失われる何かを、大切にまもつたといえる随筆(辻山良雄)▽荒川洋治『霧中の読書』どの文章も再読したくなるのはさすが(宮下志朗)▽ルロワ『アリストテレス 生物学の創造』森夏樹訳 大きな衝撃を受けた(三中信宏)▽ゲルヴァルト『敗北者たち』小原淳訳 本文は生彩に富み、しかも(一)で挿入される訳者の補足的確(阿部日奈子)▽『ロラン・バルト 喪の日記』石川美子訳 本というものが日々を送っていくためにどうしてもなければならぬ支えであることに思い至

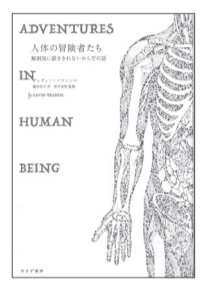
「生きていくことは、終わりのない身体変容のただなかにいることだ。成長し回復しながら、適応し老化しながら、私たちがからだはどのようにしてかたちを変えてゆく―そして、睡眠や記憶や学習によって、心も変わりゆく」

生まれくること、死にゆくこと。それは始まりと終わりを意味するのではなく、どちらとも人体が変わりつづけるプロセスにすぎない。それでも私たちは、古来より生と死に区切られた儂い時間のすべてを費やして、変化する身体とそれを受容する心を育みつづけてきたのだ。

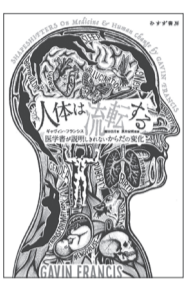
いまや医学は私たちの身体をコントロールすることに慣れて前例のないほどの力を持っているが、その力にも限界がある。私たちは、けつして避けることのできない「変わりゆく自分」とどう共生してゆけばよいのか―変化に直

臨床医学的博物誌、第2弾

ギャヴィン・フランシス
《人体は流転する 医学書が説明しきれないからだの変化》
鎌田衍月訳 原井宏明監修



▽著者既刊『人体の冒険者たち―解剖図に描ききれないからだの話』鎌田訳 原井監修 小説のような症例に人体をめぐる逸話を交えた美しい医療エッセイ。(三三〇〇円)



面する患者たちとのエピソードに、歴史・芸術・文学・神話の知識を織り交ぜながら鮮やかに描く、臨床医学的博物誌・第2弾。「医療読み物」ポピュラーサイエンス
【四月上旬刊】
(四六判320頁・予三四〇〇円)

躍動する「網」としての脳

オラフ・スボンズ
下野昌宣訳
《脳のネットワーク》

「脳科学と複雑ネットワーク科学を接合する」(はじめに)より)のが、著者のねらいだ。脳の構造・発生・代謝・進化・心理・病理……すべてが、躍動するネットワーク・ダイナミクスを紹介して絡み合っている。その網

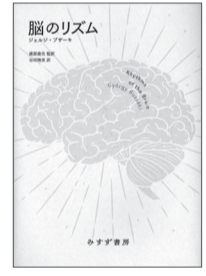
そのものに迫る壮大なプロジェクト、神経ネットワーク科学の見地へと、世界的な第一人者がいざなう書。ネットワーク科学は人間の社会関係やインターネットの研究などさまざまな分野に応用され、目覚ましい成果を上げて

『季刊翻訳』『翻訳の世界』とその時代

『季刊翻訳』一九七三年創刊。編集方針に、「広い意味の翻訳について、多角的な研究と情報の伝達を目指す専門誌」「文学や文化を、さらには政治を、経済を、そして社会を考察していく共通の広場」としたいわけだ。磯谷孝、別宮貞徳、成瀬武史、武富紀雄、高橋泰邦、小笠原豊樹、鶴見俊輔、五木寛之、西山千早、鈴木大輔、七号で姿を消した。

忘れられた研究誌に著者は偶然出会って驚く。今日新しい学とされるトランスレーショナル・スタディーズ(TS)のトピックのいくつかが既に現れているではないか。聖書新共同訳の国際セミナーが開かれもしていた。次いで『翻訳の世界』は八〇年代「インターカルチュラル」な誌面で思想界にひととき輝きを放った。

それは欧州でTSが生まれ展開したのと同時期のこと。共振するかのように日本で高まった学問的関心は、なぜ育たず、「翻訳学」の二〇〇〇年誕生説の陰に隠れたのか。二誌を丹念に言説分析、さらに辻由美・鴻巣友季子・伊藤



比呂美・西成彦・井上健・菅啓次郎・沼野充義 編集者の丸山哲郎・今野哲男にインタビュー。埋もれた地層を掘りあて、学際的学問の風通しを、経済を、そして社会を考察のよい未来を展望。「文化・社会・翻訳史」【五月初旬刊】(四六判256頁・予四五〇〇円)

▽著者編著『トランスレーショナル・スタディーズ』(四八〇〇円)

オリンピックは都市を変えるのか

五十嵐太郎
《建築の東京 2020》



東急プラザ表参道原宿 エントランス(中村拓志)

二〇一三年九月、東京オリンピック開催が決まるや前年のコンペで選出されていた新国立競技場ザ・ハデイド案がメディアで騒がれるようになり、解体工事の進む二〇一五年七月、安倍首相が「白紙撤回」、同年末の再コンペで隈研吾案が採用されるにいたった。二〇一六年八月、就任直後の小池都知事は目前に迫っていた豊洲への市場移転延期を決定するも、その後は迷走を重ね、豊洲「安全宣言」を経て築地は五輪期間限定の輸送拠点と定められた。いずれも来るべきものの具体的描写が不明瞭なまま、はじめにスクラップありきで既存施設が解体されたという印象は拭えない。はたしてオリンピックを前に東京はどのような

変化を及ぼしてきたのか。一貫して都市のメタポリズムを重視し、「すぐれた建築が壊されるとしても、その後志のある建築がつけられるなら必ずしも反対しない」著者が近過去および現に生成しつつある東京の潜在的建築風景遺産、丹下・岡本以来の建築家・アーティスト双方による東京計画の系譜、各種メディアのなかの東京を検証する。『建築』【四月中旬刊】(四六判224頁・予三〇〇〇円)

『みすず』読書アンケートでとりあげられた本

- 毎年ご好評をいただく1・2月合併号「読書アンケート」特集。さまざまな視点からのブックレビューをぜひどうぞ。みすず書房の刊行書もこのように多く紹介されています【()内は評者】。
- ナガサキ サザード『ナガサキ』宇治川康江訳 (栗原彬)
 - エムケ『憎しみに抗って』 浅井晶子訳 (李孝徳)
 - ブラウン『いかにして民主主義は失われていくのか』中井亜佐子訳 (伊藤藤二)
 - 今福龍太『ヘンリー・ソロ 野生の学舎』 (岡村民夫)
 - エヴェレット『ピダハン』屋代通子訳 (最相葉月)
 - スーリイ『中枢神経系』全2巻 萬年甫・新谷昌宏訳 (小松美彦)
 - 木庭顕『憲法9条へのカタバシス』(蔭山宏)
 - 神谷美恵子『遍歴』(吉田加南子)
 - 『モンテニュー エッセイ抄』宮下志朗編訳 (成田善弘)
 - 『アーレント政治思想集成』2 齋藤純一・山田正行・矢野久美子訳 (國分功一郎)
 - アーレント『全体主義の起原』2 大島道義・大島かおり訳 (市村弘正) ほか

本面左上「書評コラム」中のご紹介の本

- シルヴェスター『ジャコメッティ 彫刻と絵画』 武田昭彦訳 (宇野邦一)
- コーエン『フロイトの脱出』高砂美樹訳 妙木浩之解説 (成田善弘)
- オンダーチェ『映画もまた編集である』吉田俊太郎訳 (松家仁之)
- 『シユネットル』
- 『ヴェネツィアの石』
- 『霧中の読書』
- 『敗北者たち』
- 『ロラン・バルト 喪の日記』
- 『The Wandering 敗北者たち』
- 『Face Value 第一回 敗北者の肖像』
- 『シユネットル』
- 『The Perspectives of Psychiatry』



映画の題字(『海の上のピアニスト』)やメゾンのグリーティングカード、オリンピックのポスター等も手掛ける、イタリアを代表するカリグラファーのピアゼットン。この時代に手で文字を書くこと、をめぐる思索を綴った一冊。技術的なこと、線を書く修業の大事さ、大胆に、自由に書くこと、文字を書く醍醐

私の文字は、私の記し

フランチェスカ・ピアゼットン
《美しい痕跡 手書きへの讃歌》
萱野有美訳

味と受け取る喜び。紙とインク。そして、私の文字は私の生きた痕跡であるということ。作品を多数収録し、巻末には、ヴァチカンの書記官ルドヴィコ・ネッリ・アツリーギによる筆記体の教本『小品(ラ・オペリーナ)』(一五二二)を本邦初訳。アツリーギによる文字も文章も、手書き好き必見の資料だ。目次より――(手で)書く、ゆえに(我)あり/筆跡は顔/紙、ペン、考えを選ぶ/書く時間は考える時間/子供の頃から書く/二本の手と十本の指/書き留める、写真を撮るのではなく/壁に書く/商売道具/航海上の注意。「カリグラフィ・書道・芸術」【四月中旬刊】(A5変224頁・予三四〇〇円)



情報満載 ファン必携の『オーケストラ』序文リカルド・ムーティ 藤本優子・山田浩之訳
有機的存在としてのオーケストラ一般というトピックは、これまで書ける人がいなかった。他にまつたく類のないこの人間組織の核心にせまる画期的かつ最高に楽しい本を、ここに刊行。基本的問題からちよつと気になる小事まで、世界のオーケストラや楽団員や指揮者のあらゆる情報を満載。この六〇〇頁に及ぶ「事典的エッセイ」に、ファンはきつと満喫できるだろう。オーケストラの運営や組織図や人間関係はどうなっているか/近年までに四五〇回も同じ曲を演奏するというのはどんな経験か/ヴィオラ奏者の思い/配置はどのように決まるのか/ウィーン・フィルに女性が少ないのは/オーケストラによる響きの違い、にじみ出る国柄の原因は/なぜ指揮者が変わるとオケの音も変わるのか: 巻末には「主要オーケストラ略歴」「世界の主要四〇〇オーケストラ、国別一覧」ほか、膨大な人名索引・楽団名索引付。「音楽(四六判)・608頁・六〇〇〇円)

ベストセラー経済書『21世紀の資本』(山形浩生他訳、五五〇〇円)がドキュメンタリー映画に。名作映画や小説などをふんだんに使った、本で実証された理論を映像で表現。過去三〇〇年の世界各国の歴史を「資本」の観点から切り取り、格差社会の真相を分かりやすく描く。

トマ・ピケティ 原作・監修・出演 完全映画化『21世紀の資本』

20日より全国順次公開予定
出演はピケティをはじめノーベル経済学賞受賞のジョセフ・E・スティグリッツ、ジリアン・ラット、イアン・ブレマー、フランク・フクヤマほか世界をリードする経済学者たち。監督ジャスティン・ペンバートン。

【お詫言】みすず美術カレンダーをご購入のみならず、5・6月分の日付に誤植がございました。たいへん申し訳なく存じます。お取り替えをご希望の方はメール info@msz.co.jp または本紙挟み込みのハガキにてご連絡ください。ご指定の宛先へ折り返し、正しい日付を記載した5・6月分(一枚)をご送付いたします。

狂乱好景気のパブルと共に技術の受け渡しはいかに失われていったか。通り過ぎてきた時代は手でものを作る人々

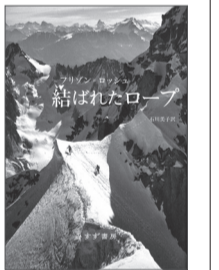
没頭した天才建具師……

「読むつがれる山岳小説」R・フリッツ・ロッシュ 石川美子訳
《結ばれたロープ》
モンブランのまわりの雪と水の岩壁からなる山々と麓の町シヤモニーを舞台にした心ゆさぶられる物語。名ガイドの父親を亡くした青年ピエール、凍傷で足先を失ったガイド見習いなど、畜産や林業で生計を立てながらも山への情熱にかりたてられる若者たちが、困難や障害をのりこえて生きてゆく。

「名品」でなく誰もが買うことのできる実用道具のみを製作し、千代鶴是秀を唸らせた月島の鑿鍛冶。最高レベルの技術を持ちながら、時代の要請を失ったその技術の生かしどころを求めて塔模型製作に

生産性と効率を追い、分業化、専門化、レディメイドが加速した、昭和から平成にかけての時代。驚異的な技術をもちつつも、無名性の中に生きた職人たちがいた。

無名の天才たちの肖像 土田昇 《刃物たるべく 職人の昭和》



読売文学賞(研究・翻訳賞) 千葉文夫 『ミシエル・レリスの肖像』



「失われたもの、受け継がれたもの」を描く。「工芸・昭和史」(四六判312頁・予四四〇〇円)▽著者既刊『職人の近代―道具鍛冶千代鶴是秀の変容』(三七〇〇円)

「マッソン、ジャコモメッティ、ピカソ、ペイコン、そしてデユシャン・さえも」と副題の付された本書が、第71回読売文学賞を受賞しました。選評に、「この巨大な精神世界に、千葉文夫は『肖像』というテーマから切り込んで、言葉とイメージの共振作用を鮮やかに炙り出して見せた(…)知と感性の見事な均衡を示す野心的な力作」(松浦寿輝、読売新聞2月1日)(五五〇〇円)

新装復刊 [4月]

臨床医学の誕生

フーコー 人間科学の医学的基盤とは何か。18世紀-19世紀の認識論的切斷、「まなざし」の変化そのものを問う。神谷美恵子訳 ¥5000

精神疾患と心理学

フーコー その後の理論展開を準備した著作。精神と身体との関係を論じ、狂気を文化のポジティブな表現と説く。神谷美恵子訳 ¥3200

今日のトーテミズム

レヴィ=ストロース 従来のトーテミズム概念を批判し、『未開』社会に人間性の普遍性を探る構造主義人類学宣言。仲澤紀雄訳 ¥4400

夕暮の緑の光

野呂邦暢随筆選
端正な文体に秘めた人生への熱い思い。行間からほとぼるる故郷九州の光と風。42歳で急逝した作家の濃密な選集。岡崎武志編 ¥2800

みすず書房 近刊のお知らせ

5-7月の刊行予定から(書名は仮です)
誰も気づかなかった 長田弘
ランスへの帰郷
D. エリボン 塚原史・三島憲一訳
自然―コレージュ・ド・フランス講義ノート
M. メルロ=ポンティ 松葉祥一・加國尚志訳
治したくない―浦河ひがし町診療所物語
斉藤道雄
牛疫―兵器化され、根絶されたウイルス
A.K. マクヴェティ 山内一也訳 城山英明協力
ハイレム・チルドレンズ・ゾーンの挑戦
P. タフ 高山真由美訳
ダブリンからダブリンへ 榎木伸明
目に見えない傷
R.L. スナイダー 庭田よう子訳
マーシャル・プラン
B. スティール 小坂恵理訳
時間 E. ホフマン 早川敦子監訳
(www.msz.co.jp/book/new/にもご案内)

みすず書房・最近の重版より

- 反殺物の人類史 J.C.スコット 立木勝訳 ¥3800
- 野生の思考 C.レヴィ=ストロース 大橋保夫訳 ¥4800
- エルサレムのアイヒマン【新版】 H.アーレント 大久保和郎訳 ¥4400
- 測りすぎ J.Z.ミューラー 松本裕訳 ¥3000
- なぜならそれは言葉にできるから C.エムケ 浅井晶子訳 ¥3600
- イギリス女性運動史【新装版】 R.ストレイチー 栗栖美知子・出淵敬子監訳 ¥9500
- トラウマの医療人類学【新装版】 宮地尚子 ¥4600
- 憲法論【新装版】 C.シュミット 阿部照哉・村上義弘訳 ¥6800
- ウイルスの意味論―生命の定義を超えた存在 山内一也 ¥2800
- 建築を考える P.ツムトア 鈴木仁子訳 ¥3200

みすず書房 営業部だより

一弊社も所属している「書物復権の会」では、読者の皆様からのリクエストに基づいて毎年五月に共同復刊を行っています。二月末で募集を終了し、各社の復刊書目が出そろいました。応募いただきました皆様へ感謝申し上げます。復刊する書籍を集めて全国まで足をお運びください。

の主要書店でフェア展開いたします。店頭にてお手にとりいただけましたら幸いです。一、二〇一四年の年末に刊行してベストセラーとなった弊社刊『21世紀の資本』が映画になりました(上にご案内)。なんと著者ピケティ氏も出演しています。東京を皮切りに全国で公開が予定されていますので、ぜひお近くの映画館まで足をお運びください。